

淨瑠璃難語考 (一)

頴 原 退 藏



自ら難語とするもの必ずしも他の難語とするものではないかも知れぬ。徒らに遼家の譏を招くやうなものではあるが、とにかく現在一般に解し難いと思はれる淨瑠璃の用語について、いさゝか鄙見をのべて見たい。それも特に分類整理などを試みて述べるのではない。思ひつくに任せてあげて行きたい。さしあたり最近學生たちの研究會で論講した『義經千本櫻』の三段目から始める。

○手すりたいたいぼう

「御わび言まつ平御免下されと、顔に似合はぬ手すりたいたいぼう」

手を摺つて免しを願ひ事を乞ふことである。古くは俳諧に、

折てたへと手すり大木や芝の枝 光永（明暦二年）
（口眞似草）

もらふ人や手すり大木の花のえた 似遁（延寶二年）
（如意實珠）

等と見え、これではテスリタイボとだけ言掛けたやうであるが、實はやはり古くからテスリタイボウと長く言つたのであらう。俳諧の例は大木に言掛ける爲にかうした形になつたものと思はれる。やゝ後にも

待つて下され尋出して埒せふと、手摺たいぼうでわらぢがけ、方々と尋廻るは……（元文元年、敵討襷袢錦、下）

といふ例が見えるが、これはむしろ後にボウがボと短く發音された訛とすべきであらう。ところでこのタイボウが何の意であるかは明かでない。或は怠狀——謝罪狀のこと。轉じて鎌倉時代以後はあやまる意に用ひる。——の訛ではあるまいかと思ふが、これを證すべき根據はない。單に全くの口拍子で添へたものかも知れない。用例は左の如く淨瑠璃に數多く見出される。

判官床几をあたふた飛をり、惡口御免と手すりたいたいぼう。（享保八年、建仁寺供養、一）

亭主が欠出手摺たいぼう、コレ雁右殿、色里へ來て俄の一ツもするに似合ぬ、ぶ粹く。（寶曆十四年、京羽）
（二重娘氣質、六）

何卒是で御納メなされて下されませと、手摺たいぼう詫する折から……（明和七年、傾城扇富士、二）

亭主はかけより手すりたいたいぼう、久八も押とめ、女子共のあだ口にはらを立とは旦那ぶすい、マアく下に御出なさりませ。（天明五年、近頃河原達引、上）

何とぞ御用捨に預りたい。コレ頼むく手すりたいたいぼう。（寛政元年、有職鎌倉山、一）

以上いづれも手を摺つて詫びあやまる意である。管見の範圍ではどうしたものか、この語は淨瑠璃に最も多く用ひられ小説類には殆ど見出されない。これはこの語が上方語たる事を示す一證とも見られる。最も新しい例は、今知り得た限では滑稽本『花街風流解』(文政七年刊)の

どふやらかうやら手すり大ほうで、本の鞘をはめたかはめぬに、

である。勿論もつと新しい例もあり、恐らく方言としてはなほ生きてゐる言葉であらう。なほかうして用例を列舉すると例へば『近頃河原の達引』が『京羽二重娘氣質』の踏襲に外ならぬ事なども分つて面白い。

○ 盆 屋

「うまい仕事といがみの權太、金懷に押入して、盆屋へ急ぐ向ふへずつと」

博突屋をいふ。盆とは賭博の賽を振る一定の場所をいふので、もと盆の上で行つたからだといふ。後には盆といへば賭博場もしくは賭博場の使用權といふ程の意を現はすことになつた。——詳しくは尾佐竹猛氏の『賭博と掏摸の研究』に見える。——盆英座といへば所謂盆の範圍を示すもので、その周りに博徒が並んで長半を争ふのである。それで

おりや鐵火の胴八といふ堀江の粹方ちや。與五郎に盆の上で百兩のいきさつ。(天保七年淺本、油商人廊話、二幕目)
盆の上の事からゆすりかたりの文句は、誰れに教へて貰つたんだ。(嘉永六年、與話情淨名横櫛、源氏店、現行本による)
等、「盆の上」といへば賭博を意味することになる。なほ盆屋の用例を淨瑠璃から二三あげて見る。

爰から直々にぼんやへでかけはつちこうなら、四つぼの胴がねしこりばくち花やりおらふ。(寛保二年、男作五雁金、二)
ぼんやしてもちよこさいで、てらの錢皆はり込……(延享二年、夏祭浪花鑑、一)

だまれやい、病氣ならてこのぼんやせいといふ赦しが有るか。(明和四年、關取千兩幟、四)

第二の例に見えるてら錢は賭博場の使用料で、即ち盆屋はこの口錢を得て業として居るのである。なほ八文字屋本など

にも用例は多く見えるが略する。

盆屋にはなほ右と全く別義の語がある。例へば

コレ此めろめは何じや、親方の内をぼんやにして引込で置いた此お山。(安永七年、道中龜山嶺、四)

こぞのさつきの夕まぐれ、道頓堀のなら茶やで、思ひ初たが縁のはし、丸腰のぼんやは丸清の二かい。(寛政十一年、

繪本太功記、六月八日の段)

等とある盆屋は、男女の密會宿を言ふのである。『讃岐方言集』に「ボンヤ 相引宿」と見えるから、京阪附近ではなほ今日も方言として残つて居るらしい。席料を歸りしな出口の盆の上に載せておけばよく、顔を見知られる事がないやうにしてあつたので言ふと。狂詩『太平樂府』(明和六年)の名高い「婢女行」の中に

二條ノ新地御靈ノ裏、二百ノ席代三百ノ酒、酒罷今宵有談論、

と見え、このボンダイは即ち盆屋の席料であるから、盆屋の語も當時からすでに存したのであらう。この狂詩を収めた『絶倒詩選笑註』(明治十五年刊)には「巫山雲雨場曰之盆屋」と註してある。明治に入つてはもはやかうした註を必要とする程になつて居たのだらう。この意の盆屋は文化・文政頃からの京阪の雜俳集・狂詩等には屢々見え、當時この種の密會宿が盛んに行はれた事が知られる。用語例の蒐集からさうした世相の裏面も窺はれるのである。参考の爲若干の例をあげて見よう。

弊になり、商賣はん昌する盆家 (後の葉)

芝居から、季時美男が行く盆家 (名付親)

寝入かね、盆屋で乳母を泣す坊 (同上)

盆屋ノ二階常紛紛、呼出釣來幾作群 (續太平文集、駱駝序并詩)

色事無盆屋、風中乍飛行。(天保佳話二篇、咏龜)

さうしてこの席料は嚮にあげた「婢女行」によつて、二百文が通例であつた事が知られるが、これは後まで變らなかつたらしい。

此度、數入已ニ覺^ツ爪^ツ、任^ト男^ニ不^レ拂^ハ二百ノ盆。〔文政年間、太平三曲、咏^ニ飯焚^ニ〕

目をすりく、二百で遊ぶ盆屋の子（文化元年、清飽）

等と見える。なほこの盆屋に關聯して『義經千本櫻』から離れるが、やはり淨瑠璃に用ひられた一二の語について述べよう。

○ 盆 が へ

「コレヤ一番切替ふと鎌倉へ盆がへ、何かやぶれかぶれの義興、うぬが命を投長半」（明和七年、神靈矢口渡、四）

この文句の前後とも賭博の言葉が続いて見えるので、これも博奕に關した語らしく思はれるが、盆がへはたゞ宿がへといふだけの意である。——右の文ではそれを賭博語の盆にかけた事は勿論であるが、——『大阪詞大全』（天保十二年刊）に「ぼん すむところのこと」とある通り、盆は住家をいふ語で、元來大阪に専ら行はれた言葉らしい。古く正徳四年刊の浮世草子『都ひながた』鶴羽^{しほ}の矢矧宿、下巻に

風にもまるゝさゝ竹も小鳥に一夜の盆はする、こよひ一夜はなびかせ給へ、つれなの君やと申すれば、

とあつて、この盆は正しく宿の意に用ひてある。而して右の條は博奕語を多く用ひて十二段草子の枕問答に擬した箇所だ隨つてこの盆もまた博奕語の盆にかけた事は明かである。たゞそれがやはり博奕語の盆から宿・住家等の意に轉じたのであるか否かは明かでない。とにかく一般には博奕の意に關係なく、單に宿の意として用ひられて居る。

七日跡に隣へ盆替^かてきた高四九^{かうしき}の中右衛門であす。（延享二年、軍法富士見西行、二）

人には沙汰なでぬつくりと、盆がへしてもかけたが因果じや、唐天竺迄もこにやならぬ。（寶曆九年、太平記菊水之巻、四）

ヲ貴様のぼんは家主がたいき上つて、たつた今宿替して來たぬく／＼の亭主であす。（安永十年、時代織室町錦緋、四）
右はいづれも宿替、引越などの場合を言つて居る。たゞし第一例だけはあとに賭博の事も見え、やはりその方への縁をもたせたものらしい。

○ 盆 な し

「待つてやらふといふてもぼんなしなりや、いんで居る内がない、暮る迄爰の内で居催促」（寛曆十二年、奥州安達原、三）
「其彦殿はとふに勘當受けてぼんなし」（天明二年、替唱歌米の時雨、下ノ一）

「ハ、お前の所は何所じやへ、こちか。こちや七月ッのない所じやはやい。ソリヤ何所じやいな。ハテ盆なしじやと打笑ひ」（天明六年、彦山權現贅助劍、七）

これは言ふまでもなく宿無し、無宿者等の意である。然るに従來の國語辭書類には宿の意の「盆」の記載がなく、随つて又盆替へ・盆無し等の語も採録されてない。宿を盆といふのはもと京阪語であらう。化政頃の滑稽本にも

なんぼわしは盆なしでも、國元には妻子もきつばにあるもんじやさかい。（文化九年、大師めぐり、上ノ上）

もとはどこの雨の宮やら風の神やら、あもとふももしれんやつじやないかい。そじやさかい盆無^{ぼんなし}で米春になつたり油^{あぶら}にも雇はれたり、（同上、上ノ中）

足腰がいたんで商賣も出來ぬくい、盆はなし、だれもひきとる者もないもんだんで、せすこんがない。（文化十三年、續膝栗毛、八上）

いま／＼しいぼんなしどもめが、おもいれどやさぬが残念じや。（高野詣、上）
等と見えるが、いづれも上方者の言葉として用ひられて居る。